

# 音楽理論の実践報告

## ——和声教育の在り方を考える——

平川 加恵

### 1. はじめに

音楽がどのように構築され、どのような時代様式であり、そこにはどのような作曲技法が用いられているか。音楽を読み解くために必要な分析力を培う「音楽理論」科目が取り上げるべき要素は多岐にわたる。その中でも、音楽の生命の根幹を成し、人間の感情表出にも直結する和声を学ぶことは、音楽家を志す全ての学習者の恒常的な訓練を要するものである。実際の演奏活動、現場において最も重要となる「聴く」ということをはじめ、和声の響きやその方向性を伝える力、和声を構築する一員として、その響きや質量について敏感に反応する力は、和声の学習の積み重ねによって培われるものである。音楽を表現すること、聴取すること、アンサンブルすること自体が和声活動そのものであるといっても過言ではないだろう。音楽の持つ宝は音と音の重なりが編み出す和声であり、これは単旋律の音楽の演奏においても不可欠となる要素といえよう。

本研究は、和声学習が音楽を奏でることに直結し、一体化するために、どのような学習過程が必要かということをも最大の課題としている。様々な可能性を模索しながら実践に移してきた和声教育の第一歩として、本校における現時点での「音楽理論」の授業内容、実践を報告するとともに、高等学校の専門教育において求められている和声学習の役割は何かということを追究することを目的とする。

### 2. 音楽理論の授業について

#### (1) 本校における音楽理論の授業について

本校の生徒の構成は、各学年が作曲専攻、ピアノ専攻、弦楽器専攻、管打楽器専攻、邦楽専攻生の40人から成る。音楽理論の授業は、全学年において週1回行われる。各学年において、洋楽専攻生と邦楽専攻生に分かれ、それぞれ担当者も異なる2つの授業が設けられている。本研究においては、筆者が担当する洋楽専攻生の授業について扱う。

#### (2) 和声に特化した内容への移行と新教科書の誕生

音楽理論で扱うべき内容が多岐にわたることは前述の通りである。時代による様式の違い、作曲家による書法の違いなど、高等学校における3年間でこれら全てを深い理解とともに網羅することは難しい。

全ての専攻の生徒たちが、音楽を表現する上で求められる和声学習を徹底して行うということから、本校の音楽理論は和声に特化した内容への移行を開始した。和声分析はこれまでも様々なスタイルの楽曲を通して、度々行われてきたのは言うまでもないが、この変革に伴い、教科書も替わることとなった。

本校の音楽理論、及び大学学部の全専攻科が必修とする和声授業において、これまで使用されてきた教科書である、島岡譲著『総合和声』（音楽之友社）に替わり、平成27年度より林達也（東京藝術大学音楽学部作曲科准教授）著『新しい和声』（アルテスパブリッシング）を教科書とする和声教育が始まった（以下、新教科書と記す）。本校において、音楽理論の内容を和声に特化するという移行は平成26年度の第3学年より試みられていた。しかし、新教科書の誕生により、平成27年度より高大連携による和声教育、新体制、新方針による和声教育が本格的に始動したといえよう。

この新教科書が、これまでの和声教育と大きく異なるところは、数字付き低音により和音を捉えるということである。この点について、著者である林氏のまえがきを以下に引用する。

演奏家にとって和声教育を直接有効なものとするためには、まず日本国内でしか通用しない和音の特殊で複雑なローマ数字表記(これはまた、移動Doを基本とした分析法に留まっている)を排し、和音というものが低音から上方へ垂直方向に音を堆積させたひとつの音響体であるという原点に立ち戻って、ヨーロッパで古来から伝統的にもちいられているアラビア数字による数字付き低音による和音表記がもっともふさわしいという結論にいたった。(中略)和声教育は本来、机上での理論的・知的認識にもとづく学習法のみならず(もちろんこれも和声学習ではないがしるにできない重要な基礎部分ではあるが)、実際の楽器(とくに鍵盤楽器)をもちいた身体的および聴覚的認識にもとづく学習が有効であるといえる。和声の習得が、演奏行為に直接かかわってくることにぜひ気づいてほしい。

このように、和声の捉え方を根本から見つめ直し、その最大の特徴は、和声を理論的に知覚することに加え、何よりも聴感覚において知覚するということである。そのため、この新教科書には、和声分析に加え、鍵盤楽器による演奏課題、移調奏課題、合唱課題が多く含まれている。

これらの移行により本校の授業内容において、これまでと大きく変わった点のひとつとして、バス課題の実施を開始した、という点が挙げられる。学習者は分析により理論的な理解を獲得し、和声を実際に演奏することで聴感覚による認識をし、さらには実際に和声の連結を書くという行為により、林氏の言葉を借りれば、和声を身体化させるという最大の方針を指導者が高等学校という早期段階で取り入れるということである。

### 3. これまでの課題と数字付き低音

音楽理論の授業は、これまで形式、和声の知識、作曲技法といった音楽作品を分析する上で必要となる基礎的知識の習得が主な内容であった。生徒が将来、自分自身の力で作品を読み解き、楽譜に生命を吹き込む作業を行うための引き出し作りをするために様々な観点からの分析を行ってきた。しかしながら、ある問題点を抱えている。それは、指導者が分析をいかに実際の演奏に結びつけるかという一番重要な点こそが、伝えきれないということである。生徒にとっても和声の分析の際、和声記号を導き出すことそのものに力を費やし、響きの感受という何より肝要な点にたどり着くことが難しいのである。和声とは、譜面を読むことによって「考えるものである」というイメージを免れない状況といえる。このことから生徒たちは、本来作曲専攻生が深く学ぶ和声を器楽専攻生が学んでいるという認識を持ち、その習得に大きな差が生じることを肯定する傾向にあった。特に、器楽を専攻とする生徒が苦手意識を持ってしまうという状況に陥りがちである。これは、和声を学ぶことと生きた音楽をすることとの間に距離を作ってしまうということではないだろうか。筆者自身、生徒から「和声分析をしたところで、その結果を演奏の際にどのように使うかがわからない」という相談を度々受けてきた。分析が分析に終わらない、分析と演奏が段階的にならないための授業方針を模索していた。この問題点に対し、数字付き低音による学びが効果的だと感じるのは、和音を数字によって視覚化することにより和音の内部構成はもちろんのこと、音程が作り出す協和、不協和による響きや手触りに注目しやすくなる点である。新教科書の使用と平行して、自身の課題であった「高校生にとって、和声を演奏活動の中に無理なく取り入れることができるということはどのようなことか、そのためにはどのようなアプローチが必要か、どのような授業展開が望まれるのか」ということを試行錯誤しながら授業を行っている。

### 4. 音楽理論の授業の現状と実践報告

新教科書とその方針により、和声を身体感覚の中に取り入れていくことに重点をおくべく、高校3年間では基本的な学習にとどめること、また、繰り返しの学習を徹底することで、和声の構造を理論的視点と聴感覚との両面で捉え、体にしみこませることを目標としている。特に1年次においては三和音の形、響きを繰り返し学習により体得するため、取り上げる実作品も、バロック、古典派の作品を中心としている。バス課題の実施は2年次より開始するという体制をとっている。

以下、今年度(平成27年度)の各学年の授業内容を、使用した実作品と共に報告する。なお、本研究の執筆段階において未実施のものは記載しないこととする。

### (1) 第3学年

第3学年は、新教科書の所持はしていないが、新教科書の内容を基本としながら、和音数字による学習、そして本格的にバス課題実施の学習を開始した。また、和声を身体化させるための様々な方法を実験的に取り入れている。これまでの学習に新たな要素を加えることはせず、数字付き低音によって和音を基礎から見つめ直し、和声学習を座学から解き放つという意識を持つことを徹底して促した。

和声の分析や楽式を中心とした音楽理論の授業により、和声の記号による分析は行ってきたものの、それ故に和音数字による学習の導入により、2年間の既習事項との混同を引き起こす可能性は多いに予想された。実際、生徒たちの和声に対する考え方や和声というものの潜在観念を新しくすることに多少の時間は要したが、殊にバス課題の実施を学習し始め、和声を自ら組み立てる作業を行うことで、次第に和音を「縦」に観察するようになった。また、それまで和声分析に苦手意識を持っていた生徒の理解力向上にも繋がった。授業においては、和音数字が伝える和音の形の特徴や質、響きの違いに常に興味を持つように促すべく、合唱やピアノによる演奏も多く交えた。また、バス課題の実施を行ったものを鍵盤楽器によって演奏する際、より美しい響きを鍵盤上で探すという姿勢も見られた。

加えて、実作品とバス課題を交えた授業展開を行った。実作品の一部の和声を4声体によるバス課題として実施し、さらに同一箇所について転回形を変えての実施を行い、実際の和声との比較をすることで、作品を外から分析することに留まらずに内側からその仕組みを捉えるといったことも行うことなど、生徒たちが和声についてより立体的な捉え方を獲得できるような内容を試行しながら進めている。また、4声体をオーケストラや弦楽四重奏に例え、和音の中の音程関係はどのようになっているか、属七和音の場合、形態によってどこに不協和音程が生じるか、また、どのようなバランスで奏するのが効果的か、同一のバス音でも上方に積まれる和音が異なればいかに効果や役割が変わるのかということに留意させるなど、様々な方法で和音の「縦方向」の知覚を促している。

以下、平成27年度に行った授業内容、取り上げた実作品とその主な学習の観点を列挙する。

#### ① 学習内容

##### ○数字付き低音の知識と理解

数字による和音の表記を覚え、和音を縦に捉えることを意識する。

形態（第1転回形や第2転回形）による音程関係の特徴、それによる響きの違いを聴き分ける。

##### ○和声書法の学習

同じ和音度数であっても、密集配分と開離配分によって響きがどのように異なるかを感じ取る。

##### ○三和音の配置と連結

同一のバス、和音度数により複数の連結を実施し、それらの響きや効果を比較する。

同一の和音度数の連結を、基本形のみのもので転回形を交えたものを実施し、響きや音楽的作用がどのように異なるか比較する。

ソプラノ声部に旋律性を有するものと欠いたものを作り、その音楽的效果を比較する。

基本形と第1転回形の響きの違いを捉える。第2転回形の用法とその効果を検証する。

#### ② 使用した実作品と主な学習内容

##### ○L. v. Beethoven 《Piano concerto No. 1》(op. 15) より各楽章の一部分

##### ○W. A. Mozart 《String Quartet》(KV387)

##### ○L. v. Beethoven 《Piano sonata No.3》(op. 2-3) より第3楽章

以上3作品、第1転回形の役割と響きの特徴を捉える。

第1転回形の連続による音楽的效果を感じ取る。

##### ○J. Brahms 《Symphony No. 1》(op. 68) より第2楽章

冒頭の部分の和声の連結をすべて基本形のみをバス課題として実施する。その後、実際の連結（第1転回形を

含んだもの)に書き換え、前者との効果の違いや旋律の起伏の誘発について感じ取る。

○ J. S. Bach 《Aus Meines Herzens Gründe》(BWV269)

VII度の和音の響きを耳で聴き取る。

この作品中に含まれる、VII度の和音を用いた連結をバス課題として実施し、書法を体得した上で作品を合唱する。

○ L. v. Beethoven 《Piano sonata No. 8》(op. 146)より第2楽章

異名同音転調が用いられている部分を取り上げ、異名同音を用いないものによって4声体で実施した後、異名同音を用いるものを書き換え、その用法を理解し、響きを知覚する。

○ L. v. Beethoven 《Symphony No. 5》(op. 67)より第1楽章冒頭

増6和音について理論的理解をした後、響きとその作用を知覚する。

○ J. Brahms 《Symphony No. 4》(op. 98)より第1楽章

増6和音による異名同音転調の仕組みを理解し、属七の和音によって、転調を伴わないものを書き換えたものとの響きの違いを味わう。

## (2) 第2学年

第2学年は、前年度1年間の授業により和声を学んではいたが、旧表記による分析であり、一つひとつの和音の構造について時間をかけて知覚するまでには至っていなかった。このことから、もう一度和声学習を基礎から組み立て直し、前述のように、新教科書の重要な点の一つである「三和音の重視」を中心とした学習を繰り返している。また、第2学年においてもバス課題の実施により和声を実際に組み立てることによる和声の理解、合唱や鍵盤奏による聴感覚や表現との結びつきの強化を図っている。実作品による学習においては、数字付き低音が、実際の演奏法そのものであるということに興味を持たせるため、J. S. Bachの作品を多く取り上げることを意識している。

以下、平成27年度の授業内容と使用した実作品、その主な学習の観点を列挙する。本年度から新体制による学びを開始させたため、内容は第3学年とやや重複している。

### ① 学習内容

○三和音の数字表記の理解

形態による響きの違いと効果を感じる。

○属七の和音の数字表記の理解

形態による響きの違い、形態による音程関係の違い、不協和音程が生じる場所、またこれらが誘発する緊張度の違い、バス音が持つ役割とトニックへの連結のエネルギーの違いを視覚的、聴覚的に体得する。

○和音の機能と終止形

終止形による音楽的效果の違いを、和音の形、和音の形態から感じ取る。

和音の機能による、和声連結に内在するエネルギーの動きを体得する。

○ドリアの和音、ナポリの和音の仕組みを理解し、聴感覚によって捉える。

○和声書法の学習

同一のバス上でも異なる和音数字により和音が作られると、バスの質量や響きの輪郭はいかに変化するかに興味を持つ。

### ② 使用した実作品と主な学習内容

○ J. S. Bach 《Christ lag in Todes Banden》(BWV4)

和音数字による和音分析、終止形の分析を行い、形態の違いによる響きの違いや築かれる音程関係による響きの違い、和声フレーズの中における作用や効果について考える。

第1転回形の連続による音楽的效果と作用について視覚的、聴覚的に理解する。

属七の和音からI度の和音への連結において、形態の違い（属七の和音の第1転回形からI度の基本形、属七の和音の第3転回形からI度の第1転回形など）によって、いかに音楽のエネルギーが変わるかを考える。

これらを分析した上で、和音の縦の響きと和声フレーズのまとまりをよく耳で捉えながら合唱する。

- J. S. Bach 《Magnificat》(BWV243) より No. 7 Fecit potentiam

和音数字による和声分析を行う。

属七の和音の第3転回形からI度の第1転回形の音楽的作用を考える。

- J. S. Bach のコラール作品による分析、合唱

### (3) 第1学年

新教科書による和声学習を開始した学年である。

筆者は、1年次の学習を和音に対する身体感覚を獲得し、将来自分自身の力で音楽を読み解くため、演奏解釈を導くための引き出しを蓄積する期間と位置付けている。そのため、和音の構造、和声分析における基礎的な要素を着実に身につけ、以後の学習で自由に発展させる力を養うために、進度を急ぐことなく繰り返しの学習を行っている。

実作品の分析も取り入れていることは言うまでもないが、和声を理論的、身体的に体得するためには、まず和声の骨格である4声体としての姿による響きを身体に浸透させることで、和音の縦方向への捉え方、実作品分析における基盤、演奏現場における聴取力への直結といったことへの頑強な実践力を築くことができると考えた。培った理論的理解、聴感覚を演奏のための引き出しとして常に開けることができるよう、実作品を用いる際には常に既習事項から見た観点を取り入れている。授業においては和音分析と合唱による体得を徹底して行っている。バス課題の実施は1年次においては開始していないが、徹底した基礎的学習が2年次以降のバス課題を伴った学習への十分な準備として行われ、身体的理解を深めるといことがねらいである。

また、楽曲を読み解く上で欠かすことのできない楽式構造についての知識を習得するため、和音の基礎的な段階が定着し次第、楽式、形式を学ぶ期間を設けている。主に古典派のピアノソナタ作品を用いての学習であるが、楽節と終止形の関係、把握とともに、和声分析、和声の形態と響きが音楽にどのような効果をもたらしているかといった、和声的観点の使用法を加えながら、楽譜に対する視点が立体的なものになるよう進めている。

以下、平成27年度の授業内容および使用した実作品、その主な学習の観点を列挙する。

#### ① 授業内容

- 三和音の構成、四和音の構成について

機能、度数の表し方を学び、響きを確認する。

形態と名称を学び、響きの違いを感じ取る。

- 数字付き低音について

和音をバスから上方に積まれる音塊であるという見方を体得する。

三和音、四和音の和音数字の考え方を習得する。

和声フレーズを和音数字と度数により分析の練習をした後、響きに注意しながら合唱する。

- 2つの減三和音（VII度と音、短調におけるII度と音）についての理解と響きによる知覚

- 和音の機能についての学習

複数の和声の連続により、和声フレーズが生まれることによる和音の文法内における機能（トニック、ドミナント、プレドミナント）を学び、和音の横への連なり、方向性を感じる。

和声フレーズのまとまりを区切る終止形の種類を学び、その音楽的作用の違いを響きにより感じ取る。

教科書の練習問題（コラール）を分析した後に合唱するという繰り返しの学習によって、和声の縦の響きや横方向への機能、終止形によるフレーズのまとまりとその効果を理論的理解と聴感覚により体得する。

- 短調に生じる変化和音について

ドリアの和音、ナポリの和音の仕組みを理解し、響きと音楽的效果を感じる。

○転調について

主に3種に分かれる転調の種類について、教科書の譜例を分析しながら学ぶ。

教科書の例を合唱することで転調を響きによって感じ取る。

借用和音について学び、教科書の譜例を合唱することによって、和音の色彩の変化、音楽効果を感じ取る。

○和音外音について

教科書の譜例により、和音外音を除いた状態のものと和音外音のある状態のものとを歌い比べ、和音外音の種類とアクセントの有無、音楽的效果も学び、表現の可能性についても考える。

② 使用した実作品と主な学習内容

○ L. v. Beethoven 《Piano sonata op. 13》 第2楽章冒頭部分

トニックとドミナントの和音の形態による響きの違いと、属七の和音の形態の違いが誘発する緊張から弛緩への色合いの違いやエネルギーの違いを感じ取る。

○ J. S. Bach 《Werde munter, mein Gemüte》(BWV154/3)

和音の度数、和音数字、転調、終止形を分析した上で合唱を行い、分析と響きを一体化させる。

○ M. Luther 《Vater unser im Himmelreich》(BWV245/5)

転調を分析し、合唱する。

○ J. S. Bach 《Wer nur den lieben Gott läßt walten》(BWV197/10)

和音の度数、和音数字によりフレーズごとに経過的転調の分析を行い、合唱する。

和音外音の分析を行う。

○ J. S. Bach 《Ach Gott und Herr》(BWV255)

ドッペルドミナントについて理論的に理解し、音楽的效果を聴き取る。ドリアの和音の効果を感じ取る。

5. 授業アンケート

和声に特化した授業内容を生徒たちがどのように感じているか、アンケートを実施した。アンケートで尋ねる内容は、バス課題を開始した2、3年生へのものと、本格的な和声学習そのものを初めて行うに等しい1年生へのものとで観点を分けた。

(1) 第2、3学年へのアンケート

第2、3学年は、和音数字による学習に移行したことによる印象や現状を中心に、特に、和声の実施を始めたことによる演奏活動への影響について尋ねた。以下、質問項目ごとに回答を列挙する。

①和声の学習（和声の実施）を始めて思うことや自身の音楽活動にこれまでと変化が生じたことがあれば書いて下さい。

- ・聴音やソルフェージュが前よりできるようになった。
- ・曲の譜読みが早くなった。
- ・バッハ作品や古典派の作品を弾くとき、どこに和声上のエネルギーがあるのかを考えるようになった。
- ・和音が五線の上だけでなく、響きでわかるようになり、演奏するときに役立つ。
- ・自分で楽譜をじっくり見て研究する時間が増えた。
- ・譜読みをするとき、和声の移り変わりをよく見るようになった。
- ・実際の曲で和音数字を気にするようになった。
- ・作曲家がどのように工夫して和声を構築していくのか、興味を持った。
- ・和声の変化に対して敏感になった。
- ・室内楽を演奏するときに、和声について考えるようになった。
- ・知識なら今までもあったが、バス課題を実施することで理解が深まり、演奏に役立てることができた。

## 音楽理論の実践報告

- ・和声の響きを意識するようになった。
- ・単旋律の曲を演奏するとき、和声をイメージするようになった。
- ・表現の仕方が増えた。
- ・横の関係だけでなく、和声を縦により意識することで、演奏水準が向上したと思う。

(以上、3年)

- ・旋律に和声を感じやすくなった。
- ・まだ活かしきれてない。
- ・楽譜に何が書かれているか、どのように弾いたら良いかなど、前よりよく考えて楽譜を見るようになった。
- ・これまでと違った観点から楽譜を見ることができるようになった。
- ・特に、室内楽に影響が出ている。
- ・パート譜を見たときに他のパートのことを考えるようになった。
- ・ピアノを弾くときやオーケストラを聴くときにソプラノとバス声部しか聴いていなかったが、学習を始めて内声にも注目するようになった。
- ・まだ難しいとしかいえない。
- ・少しだけ縦の響きを意識して演奏するようになった。
- ・和声進行を意識して演奏できるようになった。

(以上、2年)

②数字付き低音による和声学習をどのように感じていますか。また、これまでの和声のイメージと比べてどのように感じますか。

- ・まだあまり慣れていない。
- ・バッハ作品の楽譜を見たときに、通奏低音に親近感を持つようになった。
- ・通奏低音が読めて嬉しい。
- ・転回形をわかって吹くと曲の仕上がりが違うことがわかった。
- ・今まで記号が覚えられず難しかったが、数字付き低音だとわかりやすく、理解も深まった。
- ・響きがイメージしやすい。
- ・難しいが、和音の構成を考えられるようになったと思う。
- ・シンプルで合理的だと思った。
- ・より楽曲の感覚を導きやすくなった。
- ・目で見てわかるので、今までの和声より親しみを感じる。わかりやすい。
- ・難しいと思っていたが、すっきりとしていてわかりやすい。
- ・まだ少し難しいものだと感じている。
- ・和声を簡単な数字だけで表現することによって、楽曲分析をスムーズに行うことができると思う。
- ・原則から外れているものが多く、自分はあまり好きではない。
- ・わかりにくい。

(以上、3年)

- ・慣れれば、簡単に和声を捉えることができる良い手段だと思う。
- ・和声のイメージを強く感じることができると思う。
- ・和音数字になったことで戸惑いがあったが、慣れてきた。バロック作品を演奏するときに役立つと思う。
- ・これまで音をイメージでしか捉えることができなかったが、理論的に聴くことができるようになった。
- ・新鮮で楽しい。今までのものよりすっきりしている。
- ・少し混乱したが、響きがわかるようになってきた。
- ・転回形によって数字が変わるので、より表現の幅が広がった。
- ・抵抗があった。

- ・今まで学んだものよりわかりやすい。
- ・数字付き低音は、見るだけですぐに和音が浮かんでくるところが良い。
- ・調に関係なくできるところが良い。
- ・今までは各声部ごとに横の流れを聴いていたが、和音ごとに縦の響きをより意識できるようになった。

(以上、2年)

## (2) 1年生へのアンケート

①数字付き低音による和声の学習をどのように感じていますか。また、これまでの和声のイメージと比べてどのように感じますか。

- ・和音を数字で表すことによって、一目でその和音の表情を思う。
- ・以前は和音を雰囲気だけで感じとっていたが、丁寧に読み取っていくと、どんな構造をしているのかということが分かってきて、雰囲気だけでなく、理論として感じられるように意識して取り組んでいる。
- ・わかりやすい。
- ・バッハの作品で数字付き低音が出てくる曲をピアノで弾くことが楽しい。
- ・とても単純でわかりやすい。馴染みやすくなった。
- ・今まで知っていた和音の知識をより深く理解することができた。
- ・数字によって和音の重要性がわかるので、すぐに和声がわかるようになった。
- ・和声を習うと、今まで無意識だったものを意識的に感じるできるようになった。これは、音楽の良さを知ることであり、感受性を研ぎ澄ませる行いだと思う。
- ・和声は数字となるのがおもしろい。

②自身の演奏活動と音楽理論（和声の学習）との関わりについてどのように感じていますか。また、音楽理論を学ぶ以前と何か変化があれば書いて下さい。

- ・音楽理論を学んだことで、今までとは違う角度から楽譜の内容を見つめることができるようになった。
- ・終止形などをより感じることができるようになった。
- ・ただひたすら練習するのではなく、音楽の作りを理解しながら取り組むようになった。
- ・和声を学んでから、曲の美しさや精巧さに気付くことができるようになった。
- ・色々な時代の曲を聴くときに、時代ごとの響きに着目するようになった。

## 6. 授業の様子やアンケートから見た考察

アンケート結果からもわかるように、生徒たちが和声への関心を高め、その重要性について実感しているという事は、この上ない喜びである。無論、まだまだ難しさを感じている生徒もいるのは事実であるが、和声の学習、和音を「縦に捉える」ということが、演奏の場面において作用し始めているということは、数字付き低音による学びの有用性が大いに現れていると言えるのではないだろうか。また、授業の様子からも、和声記号を考えると自体に難しさを感じていたために、これまで和声学習に手応えを感じる事ができなかった生徒が、学習に楽しさを覚えている様子も見取ることができる。これは、特に転調に伴う煩雑な分析記号がないことにより、和声をより柔軟な耳で捉えることができるといったことが大きいのではないか。和音の姿を視覚的に数字に映し換えることにより、その外枠を構成する音程関係、内部構造までもを一見して捉えることができる。和音を縦に捉えるということは、演奏現場で（殊にアンサンブルにおいて）その瞬間の和音の響きに敏感になり、その手触りや質やエネルギーを捉えることと、それを音で体現することが同時に行われるということである。さらにはフレーズの中での機能や作用を考えて体現することで、結果的に音楽を縦横双方から立体的に聴取し、構築することができるということではないだろうか。このことこそが、和声は分析のための「一つの観点」、「手段」という段階から解き放たれ、音楽活動そのものになるということだと言えよう。第2、3学年においては、和声を最も基本的な形である4声体によって書き、その響きを聴くことが音楽を内側から捉えることに繋がり、演奏の場

面における深い理解を促していると言える。和声への多角的な視点による学習の繰り返しが着実に蓄積されることで、生徒たちがさらに強い実感を得ることを期待したい。

## 7. 「演奏研究」の授業との関連

平成27年度より始まった「演奏研究」は、2、3年次の2年間履修する。筆者は音楽理論と共に洋楽専攻生の演奏研究も担当している。

今年度より開始された和声教育が「和声の身体化」を方針とし、演奏研究という授業がそれと同時に開始したことは好機であった。演奏研究という授業の存在を、和声教育における方針の実現を強化するものと考えことは必然であった。また、それは分析と演奏の時間的差をなくし、分析と演奏活動を一体化するにはどのような授業が求められているかという課題に対する一つの答えとなった。こうしたことから、筆者が今年度実践している演奏研究の授業構成は、ある作品の一部を和声を中心に分析し、その場で担当の生徒が演奏し、学習者はその響きを感じると共に、効果的な表現、バランス、フレーズの中の役割、方向性を模索するというものである。

今年度は偶然にも、第3学年の時間割において音楽理論と演奏研究とが連続することとなった。このことを利点として最大限に活かすため、音楽理論で分析の教材とした実作品を演奏研究でもそのまま教材とすることで、和声を演奏活動と一体化させるという意識を促すための環境を授業のシステムから作ることにした。授業で扱う作品の楽器編成によって生徒たちが興味の度合いを変えることなく取り組むことができるのは、和声を中心としたアプローチを行っていることが、功を奏しているためであると考えている。また、いかなる楽器編成の作品であっても、他の楽器からの視点を取り入れる、ソロ作品であってもアンサンブルの視点を取り入れるなど、より多角的な考え方を提示するよう注力している。

以下、今年度の第2、3学年の演奏研究の授業で扱った実作品とその主な研究内容を列挙する。

### ○自作の和声フレーズの合唱

和声の響きや方向性を捉えることと演奏することとを同時に行う意識を持つ。

### ○L. v. Beethoven 《Piano sonata op. 10-1》 第1楽章冒頭部分

和音を度数、数字、機能の観点から分析する。また、楽式構造も分析し、これらを体現するためにどのような演奏が効果的なのかを考える。また、弦楽四重奏に編曲したものにより、さまざまな和音のバランスの作り方や和音の形態の違いによるバランスの作り方、さまざまな形態の和音の連結による効果的な響きの生み出し方、遠近感の表現や、終止形におけるバス声部の意識を考える。こうしたアンサンブルによって得られる視点をピアノ演奏による表現の引き出しとしても取り入れる。

### ○J. Brahms 《Symphony No. 1》(op. 68) 第2楽章冒頭部分

音楽理論の授業において実践した冒頭部分を、4声体のバス課題として扱うということからの発展。すべて基本形によるものと、原曲通り転回形を使って書いたものの響きを弦楽四重奏によって比べる。さらには、第1転回形を含むことによって生まれるバスのエネルギーや方向性、旋律の起伏を味わい、効果的なバランスや音色を研究する。

### ○W. A. Mozart 《Piano sonata No. 10》(KV330) より第2楽章冒頭部分

経過的な用法としての第2転回形と倚音としての第2転回形の音楽的作用の違いを学び、誘発される効果的な演奏、3拍子の中での和声が生み出すスピード感の変化を味わい、表現に結びつける。

### ○W. A. Mozart 《String Quartet》(KV 387) より第1楽章冒頭部分

和音の度数と和音数字、終止形を分析し、構造を理解する。

経過的転調による響きの移り変わりをどのように演奏に取り入れるかを考える。

第1転回形の連続による響きを味わい、バス声部の質量に注目しながら効果的な演奏を考える。

倚音としての第2転回形、1度上の属七など、2拍間隔で出現する緊張を伴った和音が生み出すリズム感を演奏において表現する。

### ○L. v. Beethoven 《Piano sonata No. 8》(op. 146) より第2楽章

転回形の違いが誘発するバスの旋律性、緊張の度合いを知覚したうえで表現する。

ドッペルドミナント、和声リズムの変化がもたらす音楽のエネルギーの変化を感じながら演奏する。  
借用和音の響きを感じながら演奏する。

## 8. 今後の展望

和声の学習は、音楽理論に留まらず音楽科目すべてにおいて中心となるべき要素ではないだろうか。また、新教科書のまえがきにもあるように、和声教育はソルフェージュの要素をも含むという意識、認識が、今一度喚起されるべきではないだろうか。音楽の体現を彩るあらゆる要素の訓練を行うソルフェージュの授業においてこそ、和声学習を積み重ねることは必要不可欠であると考え。歌うことやリズムを音読するといった、直接的な体現と和声学習が同じものであるという意識は、ソルフェージュ教育の中で可能となるのではないだろうか。音楽の色となる和声の身体的感覚とその表出方法と絶えず訓練し、楽譜を縦に読む力を早期教育において養うことは、その後の生徒たちの音楽活動をより自由に、柔軟に、そして深いものにするだろう。音楽理論や演奏研究といった全ての音楽科目が一つの円を描くように生徒たちの中で時間をかけながら集約されることで、生徒たちの音楽表現における総合的な力を向上させることができるのではないだろうか。音楽という身体活動を心から楽しむことのできる音楽家を育てたい。

本研究は、和声教育の開始期における実践の第一歩であるが、和声をはじめとする音楽における学びのすべてが生徒の中に蓄積され、総合的な形で演奏活動の場において還元されるという高い指標のもと、今後も様々な指導の可能性の試行を行いながら、生徒たちにとって有益な授業展開を継続して模索していきたい。そのために、まずは生徒たち自身が、和声を音楽活動と一体を成す存在として認識できるような授業であること、授業ごとに音楽に対する視点を分離させるのではなく、全ての学びが集約され、楽器としての体に循環して初めて、真の音楽という感情表出に結びつくという意識を自然に持つことができるようになること、早期教育においてその糸口を提供し、基盤を作り上げる場としての音楽理論の在り方を追求することが、筆者にとって究極の理念である。